

一 般 演 題 抄 錄

## 8. 当院における血液製剤の使用状況

吉田 真由美 梶谷 佳代 大塚 志保  
峯 佳子 阿波屋 典子 藤田 往子  
金光 靖 椿 和央\* 堀内 篤\*

近畿大学医学部附属病院輸血部・\*第3内科学教室

### 目 的

近畿大学附属病院における使用血液製剤の推移、手術時の血液依頼および、使用状況について報告する。

### 対 象

1988年4月から1991年9月までの血液使用単位数を6カ月毎にまとめてその推移を検討した。また、1991年4月から9月までの血液使用単位数、使用血液種類の比率、手術件数と輸血実施率および、手術時の血液使用状況を科別に比較した。手術時の血液依頼状況は、クロスマッチされた赤血球製剤の単位数を、実際に輸血された赤血球製剤の単位数で割り、C/T比を求め検討した。

### 結 果

血液使用単位数は、1989年9月までは増加したが、1989年10月から1990年3月までは、赤血球製剤と新鮮凍結血漿の減少を認め、その後徐々に増加し、横這い傾向となった。

内科系、婦人科では濃縮血小板の使用が多く、心臓外科では全血、特に新鮮血の使用が多かった。整形外科、形成外科、心臓外科、第3内科では自己血を使用し、全輸血に対する比率は、整形外科、形成外科でそれぞれ48%、30%であった。第1および第2外科では新鮮凍結血漿が多く使用されていた。

全体の輸血実施率は14.4%で、心臓外科が65.5%と最も高く、ついで脳外科、第2外科の順であった。眼科では手術件数が多いが、皮膚科とともに輸血は実施されていなかった。

輸血実施率、手術中平均出血量が低いのにC/T比が高い術式がみられ、C/T比の高い術式は、幽門側胃切除、心房中隔欠損、結腸切除であり、それぞれ9.4、7.5、4.8であった。

### 考 察

血液保存用添加液MAPの使用によって、自己血の保存期間が長くなるため、各科の自己血での対応および、C/T比が高い術式では、血液の有効使用を計るためにもT & Sの再検討が必要と思われる。